

うだが、家業の農業を継いだが、労働はきつく収入は少ないので、父のすすめで馬車による建材業を再開した。父とよく衝突したので、次弟を東京から呼び寄せ、二台の馬車で建材業、主に畑の床土を一メートルくらい取り、壁土として売り、後は田にする。このようにして土地を増していった。時代と共に馬が車となり、今はブルドーザー、シャベルローダー、ユンボ等、土木機械を使い、長男が家業を継いでいる。二男二女に恵まれたが次男は夭折した。農業くらい利益の上からぬものはない。老人農業でも作業しており、末はどうなる事か。私ら余命幾ばくもなく、なるようにしかならないのだ。今まで苦勞はあったが運が良く生活の困る事もなく来たが、孫の代は分からない。余生を楽しく暮らしていきたい。

## ソ連抑留の顛末

三重県 加藤 千春

### 一、はじめに―私の履歴

昭和六十四（一九八九）年一月七日、昭和天皇は身まかれた。波乱万丈の昭和は幕を閉じた。昭和の時代を青春の時代を生き抜いた、語り尽くせぬ昭和の思い出のその悲しみと喜びは、このまま風化してしまいたくない。私は昭和の御代の子であった。私の激動の昭和を回顧する。

昭和六年小学校入学―十二年中学入学―十六年中学五年陸士受験―二十年六月陸士（本科）卒業―終戦―ソ連抑留生活―帰国（二十三年十一月）―歯科大学受験―同卒業（二十七年）―歯科医業現在に至る。

二、私の抑留の経過（昭和の出来事の中からソ連抑留に関係するものに限定する）

### 抑留の原因

(1)遠因 日清戦争（一八九四）

日露戦争（一九〇四―一五）

満州事変（一九三一―三三）

日中戦争（一九三七―四五）

満州国独立（一九三二）

太平洋戦争（一九四一―四五）

(2)直接の原因

原子爆弾の広島投下（一九四五年八月六日午前八時十五分）引続き長崎に投下

ソ連、日ソ中立条約を破り宣戦布告（一九四五  
年八月九日）し満州に侵攻

終戦の詔書

八月十五日関東軍司令部直屬独立自動車第六四

大隊（満州第七九七部隊）の部隊長室にて玉音

放送を聞く。敗戦と知り落胆の極み。

抑留までの経過

満州七九七部隊―通化（関東軍の集結）―平壤

（武装解除）―三合里弥勒洞の元陸軍の廠舎

ソ連抑留生活の始まりである。

その後エラブカの収容所までの経過

スコロダモイ（早く帰れる）とだまされつつ、至るところでダワイ（動作を促す動詞で、広く何にでも使われ、特に略奪するのに使われる）されながら欧露の奥深く拉致された。

まず貨車で清津へ―船に乗せられソ連領ボジェット湾へ（初めは日本へ向け進んでいたが船の故障のために一時停止、これもだましか。その後は方向転換する）上陸は十一月三日（雪が降っていた）―十二月に入りシベリア鉄道の貨車で二十三日間（ウラルを越える）―雪中死の行軍（何日一日じゅう歩いたか定かでないが、何人の人が突然見えなくなり行方不明になったかは分からない）―ボルガの支流カマ河畔のエラブカのラーゲルに入る（十二月三十一日夜）明けて昭和二十一年一月一日であった。

エラブカの抑留生活

帰国までエラブカだけで他への移動はなかった。

食事は一日二食で生命を維持するぎりぎりの食事

だったが、労働で外に出た時、山野草を採取したり、一般ロシア人からバター等ももらったり物々交換したりして、栄養を補給していた。

労働は木挽きと泥岩運搬作業の繰り返しで、木挽きの作業中転倒骨折、今でも右手が左手より短く、当事を思い出すことしばしばである。

二十一年一カ月後、エラプカよりナホトカ経由して興安丸にて函館に上陸帰国した。

家族と対面した時、栄養失調のためかよく肥っていて驚いていたことを思い出す。

翌年歯科関係の学校に入学、現在も現役にて歯科医業に、できる範囲で頑張っている。

### 三、結び

我々は終戦の詔勅どおり、堪え難きを堪え忍び難きを忍ぶ生き方を立派に実践してきたと自負すると共に、一部を除き反共愛国心をもって帰国し、帰国後は我が国の発展のために多大の貢献をしてきた。この事実は日本民族の歴史で忘れてはならない事実としていつまでも留めておかれるべきであらう。

## 捕らわれの歌

愛媛県 竹内 一 利

昭和二十(一九四五)年十月八日、満州国明月溝で武装解除され、ソ連の貨物列車に荷物同然に乗せられ、二泊三日かかって到着したのは、ハバロフスクから更に百キロの奥地、コムソモリスクの山中の捕虜収容所である。

これらの記録は、軍隊手帳の余白に書き綴ったもので、帰国の時の身体検査で没収されることを防ぐため、眼鏡の蔓に巻きつけて、その上に木綿糸を巻き、眼鏡の蔓が折れたのを修理しているように見せ、帰国後アイロンをかけて判読し、清書したものである。

捕らわれ日記より(抜粋したもの)